

2024. 4. 7 (日) I コリント 15 : 6 ~ 11

15:6 その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現れました。その中にはすでに眠った人も何人かいますが、大多数は今なお生き残っています。

15:7 その後、キリストはヤコブに現れ、それからすべての使徒たちに現れました。

15:8 そして最後に、月足らずで生まれた者のような私にも現れてくださいました。

15:9 私は使徒の中では最も小さい者であり、神の教会を迫害したのですから、使徒と呼ばれるに値しない者です。

15:10 ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは無駄にはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。働いたのは私ではなく、私とともにあった神の恵みなのですが。

15:11 とにかく、私にせよ、ほかの人たちにせよ、私たちはこのように宣べ伝えているのであり、あなたがたはこのように信じたのです。

#### <説教>

先主日は、復活節（イースター）でした。使徒パウロはコリント人への手紙第一 15 章の中で、まず主イエス・キリストの十字架の死とよみがえり（復活）が、最も大切な福音の内容、福音の中心であることを明らかにしました。イエス・キリストが私たちの罪のために十字架で死なれ復活なさったという福音は、「使徒の働き」にも記されているように、初代教会の最初から宣べ伝えられて来たことでした。そのように、キリスト教会は最初から十字架と復活の主イエス・キリストの福音が宣べ伝えられ、その福音を信じる人々の集会（エクレシア）でした。コリントにあった教会の人々も、同じように使徒パウロが宣べ伝えた福音を受け入れ信じて救われたのでした。

ですから、そのコリント教会の中に「死者の復活はない」という人々がいるということを知り、パウロは黙っているわけにはいきませんでした(12)。イエス・キリストが確かに復活された事実を改めて強調し、伝え、教えなければなりません。それで、復活されたイエスが〈ケファに現れ、それから十二弟子に現れたこと〉(5)に加えて、更に多くの兄弟たち、使徒たちに現れたことを明らかにしました(6-7)。キリストが現れた五百人以上の兄弟たちの大多数が今なお生き残っているというのですから、彼らはいつでもイエスの復活を証言することができました。と同時に「その中にはすでに眠った人も何人かいます」ともパウロは言いました。パウロはキリスト者と言えども〈人間には、一度死ぬこと…が定まっている〉(ヘブル 9:27)という現実を決して忘れません。それでも、そのすでに眠った何人かもやはり復活のイエスを見て、信じて死んだ人々でした。つまり、その人々はイエスの復活を自分の復活の保証として頂き、復活の希望を証して死んだ人々だったはず。ならば、その人々がこの地上で生きているときに証ししていた復活の希望の言葉もまた、〈今なお生き残って〉いた大多数の兄弟たちの証言に負けず劣らずイエスの復活を力強く証するものだったはず。そういうわけで主イエスを信じて主のものとなった私たちは〈生きるにしても、死ぬにしても〉(ローマ 14:8)主イエスの復活の証人なのです。それゆえ、やはり私たちがこの地上で生きているうちに十字架の死と復活の主イエス・キリストを信じ、「堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励む」(58)

ことが大事であると改めて思われます。

さて続けてパウロは主イエスの肉親である弟〈ヤコブ〉の名前を挙げました。彼は他の兄弟たちと一緒にイエスを信じていませんでした（ヨハネ 7:5）。しかしそのヤコブに復活のイエスが現れてくださり、彼もイエスを信じ、初代教会の中で大事な働きをするようになりました。彼は「ヤコブの手紙」を書き残しました。そして殉教したと言われていました。パウロがここでイエスが現れてくださった人として最初に挙げた使徒ペテロ（ケファ）もやはり殉教したと言われていました。人を恐れてイエスを知らないと言ってイエスを裏切ったペテロ、そして幼い時からイエスの一番近くにいながら大人になってもイエスを信じていなかったヤコブ、どちらもが初代教会の教師として用いられ、最後は死に至るまで忠実に主に仕えました。それは彼らの罪のために十字架で死なれ、復活された主イエス・キリストの力によることでした。復活のイエスが彼らに現れてくださり、信仰を与え回復させてくださったおかげでした。

そしてパウロは復活のイエスが現れてくださった人間の最後に自分を挙げました(8)。それは使徒の働き 9 章（また 22 章）の中に記されている、突然の回心のときのことです。復活の主イエスが直接ご自身を現された人としてはパウロは最後の人でした。彼はそんな自分のことを〈月足らずで生まれた者のような私〉と言っています。ペテロやヤコブ、その他の使徒や兄弟たちのようにはイエスと一緒にいて信じたわけではない、いわば未熟児のようにキリスト者として（世に）生まれた、ということでしょうか。またはこれは流産や死産を表しているということもできるので、その場合は「(ほとんど) 死んでいた」というような意味になります。どちらにしてもパウロは自分が〈神の教会を迫害した〉(9)者だったという「負い目」を忘れていませんでした。ペテロやヤコブたちとは違い、パウロはかつてイエスから遠く離れていただけでなく、〈激しく神の教会を迫害し、それを滅ぼそう〉(ガラテヤ 1:13)と本気で考え行動していました。神に、イエスに激しく敵対、反逆していました。そんなパウロに復活のイエスの方から近き、ご自分を現し、御声をかけ、ご自分の大使（使徒）として召していただきました。それでパウロはイエスの十字架の死が自分のすべての罪を赦し贖うためだったと知り、信じました。そのイエスが復活して罪と死に打ち勝ち、神に認められたご自分の義に与らせてくださるお方だと知り、信じました。イエスに激しく敵対し、イエスを迫害していたパウロの罪は完全に赦され、イエスの義が与えられ、死んでも生きる復活のいのちが与えられました。しかしパウロは、殊にキリスト者を始めとする多くの人々を自分の言葉と行いで躓かせ、傷つけ、時には死に至らしめた自分の罪の記憶や痛みを忘れてはいませんでした。それでパウロは自分のことを〈使徒の中では最も小さい者であり、…使徒と呼ばれるに値しない者〉(9)だと徹底的に神の前に身を低くするほかなかったのです。

それでパウロはへりくだりつつ、感謝と喜びをもって〈神の恵み〉を告白しました(10)。かつて神の教会を熱烈に迫害していたパウロを全く正反対に、イエスの熱烈な使徒、神の教会の建設者に造り変えたのが〈神の恵み〉でした。〈私に対するこの神の恵みは無駄にはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました〉と言います。しかし彼が自分の力や功績を誇り、おごり高ぶっているのではないことは、〈働いたのは私ではなく、私とともにあった神の恵みなのです〉と言っていることから明らかです。こうしてパウロはすべては〈神の恵み〉によると告白して神に栄光を帰しました。

ここでパウロが言っている〈神の恵み〉とは、イエス・キリストの十字架の死と復活のこと、その力、その恵みのことに他なりません。パウロは、神に反逆していたのに神に従順な者に変えられました。悪魔のしもべ、手下として悪魔の働きをほかの誰よりも多くしていたのに神のしもべ、キリストの使徒として誰よりも多く働く者に変えられました。悪魔と繋がっていたのにキリストのからだに繋がれました。闇から光に、死からいのちに移し入れられました。パウロの「古い人」はキリストとともに十字架で死に、キリストとともに「新しい人」に復活させられました。不義の道具として罪に献げられていたパウロの手足は義の道具として神に献げられるようになりました。そのすべては〈神の恵み〉すなわちキリストの十字架の死と復活の力によることでした。

私たちの罪のために十字架で死なれ、復活されたイエス・キリストを、その福音を信じる私たちもパウロと同じく「神の恵みによって今の私になった」者たちです。私たちも今キリストにあって罪を赦され、永遠のいのち、復活のいのちに生かされていることを告白し、感謝し、神の前にへりくだり、神に従い、神の召しに応じて生きたいと願い祈ります。